

08・イヴとおそとで公認愛

『07・イヴとこれから公認愛』から数年後。

とある夏の日。土曜日の、十一時ごろ。

天気は晴れ。気温は高めで、いかにも『夏!』という感じの日差しが、主人公の部屋に入ってくる。

場所は、主人公の自宅。

現在、イヴは逢瀬学園を卒業し、それから数年を経て社会人となった。主人公は変わらず逢瀬学園の養護教諭を続けており、二人は忙しくも充実した日々を送りながら……現在も幸せな半同棲生活を続けていた。

そんな今日は、主人公が初めてイヴの両親に会う日である。

先週は、主人公が家族にイヴを紹介し、そちらは無事にうまく行った。なので、つまり……今日が肝要だ。

今日さえない感じに乗り切れば、数年前、二人が作り上げた将来の展望が、いよいよ現

実のものになっていくのである。

だがこの『雪城家↓広末家』という、主人公にとって楽な順に挨拶を済ませようとしたのがいけなかった。

決戦を迎えた主人公は昨夜からまるで眠れず、今も、ガチガチに震えて緊張している。まだ出発の時間まではずいぶん余裕があるというのに……顔は真っ白、指先は冷え切り、おまけに頭痛までしてきた次第である。

なので主人公は今、自室に居るというのに隅っこに縮こまり……事前に自分で用意した『段取りメモ』をすぎるように握りしめて、プルプルと小さくなっている。

——ああ、ついにこの日が来てしまった……！

わた、わたしは、無事に今日という日を終わられるのでしょうか……！？
うっ。なんだか気分が悪くなってきた。

あーメモ読も。もうボロボロになるほど見返したけど、一回段取りメモ読んどこ。
イヴちゃんまだ支度してるし、ここで待ってよう……。

と、主人公が思っていると……ちやうど支度を終えたイヴがやってきた。

※音声ここから※

SE1 イヴが主人公の部屋の扉をノックする音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「うわあ！　はい！　どうぞお！」

SE2 イヴが主人公の部屋の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

SE3 イヴが主人公の部屋の中へ入ってくる足音

【最初から最後まで流す】

イヴの声は、トラック07までよりも、少し大人っぽくなっている。

●中央　やや遠い

「いつものトーンで、何でもなし事かのように話しかける。

声が、トラック07までよりも少し大人っぽくなっている」

おーい。せんせー。

ちよつと早いけど、そろそろ出とく？

【先ほど『日本の、主人公達の住む街の最寄りの空港に着きました』という連絡があつた】
うちの親、もう空港着いたって」

〈主人公〉

「なに！」

主人公、驚きで、ビヨン！ と隅っこから飛び上がる。

今の主人公を漫画で表現したら、顔は驚きでと不安で青ざめ、目と口は縦に長い楕円となる。それから、頬は思いつきりこけていて、顔自体も歪んで縦に伸びていて……そう、まるで『有名な絵画をコメディ風にデフォルメしてみました』といった姿に描写される事だろう。

イヴ、そんな主人公のそばまで近づく。

● 中央

「くすくすと嬉しそうに。」

主人公が今日の食事会に向けて、入念なチェックをかかさずにいる事が嬉しい」
あれ。また段取りメモ見てるし。

【優しく励ます。今日のイヴはママモード寄りである】

それだけ準備してるなら大丈夫だよ。

緊張する事ないって」

〈主人公〉

「するよお！　するに決まってるじゃんかあ！」

主人公、緊張のあまり、早速イヴにぴえーんと泣きつく。

この数年で、イヴはすっかり大人の女性になった。

それはあまりにも魅力的で、毎日一緒に居る主人公でも惚れ惚れしてしまうくらいだ。

それなら、一緒に歳を重ねた主人公も同様に、さらに落ち着きや渋みを増しているはず
なのだが……。

残念な事に、主人公はあまり変わらなかった。

少なくとも、見た目は順当に大人らしくなっていくだろうと思っていたのに、そちらま
で『全然変わらないね』と言われる始末である。

それはまあ、若々しく見えるという事なので、喜ばしい事と捉えてもいいのだが……。

主人公は『このペースで行くと、そのうちわたしとイヴちゃん、どっちが年上なのかわからなくなっちゃうかも』と危惧しているのだった。

だってイヴちゃん、最近ますます包容力が増してきて、ママ力がすごい……！
もう一生イヴちゃんに甘えて過ごしたい。いや毎日甘えてるけど。

主人公、ママなイヴにメロメロになりながらも、なお震えている。器用である。

● 中央

「穏やかに笑う。以前よりも笑い方が大人っぽくなっている」
あはは。

「ここから※マークのセリフ終わりまで、優しく励ます。

イヴの両親はすでに主人公に好意的で、今日も会うのを楽しみにしている事。

また、彼らも同様に緊張しており、特に一昨日は、当日のコーディネートコーディネートの監修をリモートで頼まれた事などを伝える」

大丈夫だよ、普通の親だから。

全然好意的だし、今日も楽しみにしてるみたいだよ。

「少し間をあけてから。優しく」

知ってるでしょ？

一昨日とかリモートでさ『先生に会う時用の服』決めるの付き合わされたんだから。それに。いつもやってるじゃん。生徒の親と話すのなんてさ」

このようにイヴは、今日四人で会う事について、何の心配もしていない。

『主人公は間違いなく、両親に気に入られるだろう』そう確信しているからだ。特に、学生時代のエピソードは強力だ。

『イヴが変質者に付きまとわれた所を、偶然居合わせた主人公が助けてくれた』『その後も心配して、学校の許可を取った上で、しばらくバイト先まで迎えに来てくれていた』なんて事が過去自分達にはあったのだから、ここまでしてくれた主人公に、両親が強く出る事はまずないと思っている。

事実、イヴの両親には『自分達の仕事の都合で、娘を一人にしまっている』という負い目がある。

だからイヴはこれまで両親に何かを反対されたり、口を出されたりした事はない。

なので、今回も大丈夫だろう。もし大丈夫じゃなかったとしても、その時はしっかり反論しよう。主人公の良さを伝えるエピソードは、無限にあるのだから……。と、思っている。

しかし、主人公はそうは思っていない。

『先生に会う時用の服を選ぶ』というのはつまり……。

『ナメられない服』『戦闘服』を選んでるんじゃないですかねえ……!!?

などと、まだ隅で震えている。

〈主人公〉

「確かにさあ。

イヴちゃんのお父さんお母さん世代の方と話す事自体は慣れてるけどさあ！
でも、今日はわけが違いますから！

てかもうイヴちゃん、逢瀬学園の生徒じゃないし！」

● 中央

「『交際相手として』を強調して。『交際相手』だけを声音を変えていうイメージで。

まるで『今理解した』みたいなふりをする。

本当は『今日はわけが違う』つまり『今日は特別なので、緊張する』という言葉聞き
たかっただけ」

あ、そっか。

今日は先生として会うんじゃないくて、私の交際相手として会うから、緊張してるのか。
【嬉しくなる。

緊張して震えている主人公には申し訳ないが、ここまで真剣に今日の食事会に挑んでくれている事が、とても幸せ】

へへへ。そうだよね。

それにもう、生徒でもなかったね。ふふふ。

【少し間をあけてから。

先週の、主人公宅へ挨拶に行った時の事を思い出す。

『先生んち』は『先生のうち』の略】

てか、それを言うなら私だって、先週先生んち行った時は緊張したよ。

花音さんが居てくれたから何とかなっただけど」

〈主人公〉

「そうなのよね。あの時は、花音が全部何とかしてくれたもんね」

主人公、先週的话题を振られて、花音の八面六臂の活躍を思い出す。

確かにあれは心強かった。

家に到着した時には、もうすべてが済んでおり、主人公とイヴはもう、主人公の両親と、

楽しく会話しながらご飯を食べるだけでよかった。

つまり、花音が全部根回ししておいてくれたのである。

むろんそれは、主人公の強い頼みであり、主人公と花音が協力して行った結果だ。それでも、主人公は頼もしかった。

改めて『花音が居て良かったなあ』と思ったのである。

ところで花音には、いつかの懸念のように、関係は早い段階でバレていた。

ある日、二人で意を決して打ち明けた所『あーやっぱりねえ』という答えが返ってきたのである。

それから準備が整うまでは、主人公とイヴの交際は、三人だけの秘密となっていた。

しかし先週、いよいよそれは解禁された。

これに喜んだ花音は、件の雪城家とイヴの食事会でも大いに張り切り、特にイヴに対しては、もはや完全に『先輩風』ならぬ『姉風』を吹かせている。

一人っ子のイヴもまた、これが嬉しかったようだ。

かくして二人は、現在ではすっかり姉妹のような関係になりつつある。

そんな賢く、やる気にあふれ、よく働く妹と、穏やかで落ち着いた性格のママ系彼女を持った主人公は、つくづく幸せものである。

イヴ、さらに近づく。

●中央 至近距離

「しれっと提案する。

なんだか言い方が花音っぽくなる。

もちろんこれを主人公は拒否すると理解している」

じゃあ、そんなに不安だったら、今日も呼んどく？ 花音さん。

将来私のお姉ちゃんになってくれる人だし、お願いしたら助けてくれるかもよ」

〈主人公〉

「えっ♡」

それ、ちよつといいかも……♡

主人公、不安のあまり、一瞬よからぬ考えが頭によぎる。

確かにそれなら、自分はそのごく楽になるだろう。そう思ったのだ。

だが、すぐにぶるぶると首を振って、ご遠慮する。

いやいやいや。それはいかん！

この人生の難題を、イヴちゃんの伴侶であり、花音のお姉ちゃんであるわたしは、ちゃんと自力で乗り越えなければならぬのですよお！

と、思ったからである。

たとえば楽だからと言って、ベストだとは思えない道を選んではいけない。
今日は主人公がイヴの両親に、最大限自己アピールをする日なのだから！

〈主人公〉

「いや、頑張る！」

お姉ちゃんの花音がいなくても、ちゃんとやって見せますよ！」

●中央 至近距離

「満足げに。主人公なら必ずそう言う」と理解している」
ふふふふ。

【ここから※マークのセリフ終わりまで、優しく励ます】
よし、その意気その意気。
そうだよ先生。

今日のご飯会ちゃんと終わったら、一杯楽しい事するんでしょ？

明日（あした）は反省会あるいは海、来週は遊園地。再来週は旅行行くんだから♥※

〈主人公〉

「そうだそうだ！ わたしはがんばるぞお！」

主人公、まだ震えている手を突き上げ、無理にでもテンションを上げていこうとする。イヴはそんな主人公を、ほほえましく見つめている。

何年たっても、主人公とイヴはこんな調子だ。

年齢や立場の割にはとぼけた所のある主人公と、昔からずっと安定して頼りがいのあるイヴ。

きっとこれからも、二人の関係は変わらないのだろう。

変わるとすれば、それはすべていい方向に向かうためのものだと、主人公は信じたい。

●中央 至近距離

「満足げに。主人公なら必ずそう言う」と理解している」

そうそう、頑張る♥

「少し間をあけてから。」

優しく。緊張しながらも己を奮い立たせている主人公の事が可愛くて愛おしくて、キスしたくなっている」

ねえねえ、先生。もっとこっち来て」

〈主人公〉

「ん？」

と、ふとここで、イヴが主人公を呼びよせた。

——おや。もう十分近くにいた気がするんだけど、一体なんでしょう……？

と。不思議に思いつつも、主人公が素直に従うと……。

イヴが軽く、頬にキスをしてきた。

● 中央 至近距離

「※1回※ 頬にキスする」

ちゅ♡」

〈主人公〉

「！」

イヴ、左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと嬉しそうに】

……あの頃二人でおうちで話してた、たくさんの事。

『してみたい』『叶えたい』って思った事の全部。

今日からどんな現実にしてもいいからね。

これから、みんなにちゃんと私達の関係を知ってもらって。

二人でお揃いのドレス着て結婚式挙げて、南の島で新婚旅行しようね。

私、先生のお陰で、ずっと幸せだったけど。

これからはもっと楽しくて幸せになるって思ってるから」

〈主人公〉

「……♡」

そうだ！ そうだよね！ イヴちゃん♡」

SE 4 主人公がイヴに抱きつく音

【最初から最後まで流す】

主人公、イヴの言葉が嬉しくて、一気にパワーが沸いてくる。
やる気も勇気も思いっきり充填されたので、今なら、何でもできそうな気分である。
主人公、その勢いのままイヴに抱きつくと、今度は自分が想いを伝ようと口を開く。

〈主人公〉

「あのね、イヴちゃん、だーい好き♥

今日を迎えるまで、ちよつと時間がかかっちゃったけど。

わたしの愛は増すばかりだよ♥ 好き♥ 愛してりゅ♥

わたし、イヴちゃんの事、何が何でも幸せにするからね♥」

そんな主人公を見て、イヴはとても嬉しそうだ。

だから主人公は、これまで自分のしてきた事を肯定できる。

すべて正しい事をしてきたとは言わない。間違った事も、自分はしてきた。

それについて言い訳をする気はないし、安易に『過ぎた事』『今となっては小さな事』

にしようとも思っていない。

だけど『自分なりにベストを尽くした結果だ』とは言いたい。

誰にも言えない秘密の恋を、みんなに打ち明けられるものに変える。

主人公はそのためにこの日まで生きてきた。

それがなかなか受け入れられなかったり、咎められたりする事があっても、決して自分はイヴのそばから離れない。

今日は、その気持ちを、周囲の人々に理解してもらうための大切な一歩なのだ。

イヴ、中央に戻る。

●中央 至近距離

「※3回※ キスされる。

ん♡ ん♡ んー……♡

【少し間をあけてから。とてもとても嬉しい】

ふふ。もう、知ってるよ♡

先生が私の事。何が何でも幸せにしてくれるって事はね♡

【少し間をあけてから】

先生はずーっと私のそばにいて、守ってくれた自慢の人。

今日やっと紹介できるの、私も楽しみなんだから。

【少し間をあけてから。優しく、真剣に】

※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします
大好きだよ。先生」

イヴ、左耳にささやく。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【ひそひそと嬉しそうに】

まだ結婚してないけど。今先に誓うね。

私も絶対、先生の事一生幸せにするから。

これからもずっと。一緒に居ようね」

イヴ、中央に戻る。

● 中央 至近距離

【少し間をあけてから。

『では、そろそろ気合を入れて行きましょう』という感じで】

では。まずは明日が反省会にならないように頑張りましょう」

〈主人公〉

「うん！ よーし！ わたし頑張るよ、イヴちゃん！」

主人公、大きく頷くと、荷物を取り、それから、イヴの手を握る。

ちよつと握り始めるのが早すぎた気がするし、ドアを閉めるとか、鍵をかけるとかですぐに離す事になりそうだが、それでもつなぎたかった。

自分はイヴが学生の頃からここににいるし、この手はイヴに力を貸すためにある。

主人公がそう思っている事は、何回伝えてもいいだろうと思ったのだ。

●中央 至近距離

「嬉しそうに。主人公が元気になったのが嬉しい」

じゃあ、準備OK？

【優しく確認する】

忘れ物ない？」

〈主人公〉

「持った！」

イヴが指を絡めながら嬉しそうに微笑み、主人公もそれを受けて笑顔になる。
きっと明日は、楽しく海で過ごせるだろう。

仮に反省会となっても、イヴは笑って聞いてくれるはずだ。

そう思いながら、主人公は、イヴと並んで歩いて行く。

これから素敵な事がたくさん訪れそうな、夏の日の事だった。

● 中央 至近距離

「嬉しそうに。自分達のこれからが、楽しみで仕方ない」

よし ♡ じゃあ……行こっか ♡」

SE5 主人公の足音

SE6 イヴの足音

【最初から最後まで流す】

【同時に流す】

【SE5がSE6に合わせる形で、同時にフェードアウトする】

ここでフェードアウトして終了。